REPORT @KCUA

ISSN 2435-5018

2020–2021

Kyoto City University of Arts
Art Gallery @KCUA

Table of Contents
目次

展覧会｜Exhibitions
13 特別展｜Special Exhibitions
45 申請展｜KCUA Open Call Exhibitions
67 大学事業｜KCUA Exhibitions

72 印刷物｜Printed matter
74 刊行物｜Publications
77 「動き」を記録する――アーカイブをめぐる対話｜Dialogue
84 @KCUAについて｜About @KCUA
86 運営委員会｜Steering Committee

凡例
・ 肩書きは2020年度当時
・ 特に会場名の明記のないものは京都市立芸術大学ギャラリー @KCUAにて実施
・ Names are listed in Japanese alphabetical order (some exceptions may apply).
・ All exhibitions and events were held at Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA unless otherwise noted.

COVER PHOTOS

京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展／
横内賢太郎「誰もに何かが（Something for Everyone）」

二つの展示をパラレルに展開させることを試みた実験的なプロジェクト。オランダに滞在中の横内賢太郎とはオンラインで対話しながら準備を進めた。また展覧会に関連して、横内がアーティスト・イン・レジデンス・プログラムで滞在中のアートスペースpuntWG（アムステルダム、オランダ）と@KCUAとの共同オンライントークイベント、ならびにmamoru（アーティスト）をゲストに迎えたオンライン・会場同時トークイベントを実施した。新型コロナウイルス感染症のパンデミックで一気に加速した「リモート」のスタイルは、今後の「ニュー・ノーマル」になるのだろうか？

（→pp. 37–44）

REPORT @KCUA

2020–2021

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts
@KCUA

SCHEDULE @KCUA
.04 – 2021.03]
4月 APPR.
5月 MAY.
6月
8月 AUG.
9月
10月 OCT.

Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA 2020–2021

「@KCUA（アクア）」とは、京都市立芸術大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所（サイト）を示す「@」を付けたもので、音読するとラテン語の「アクア＝水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理念を表現しています。

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAでは、その名に込められた思いのもとに、流動体のように軽やかに、アートとひとをつなぐ活動を行っています。@KCUAとその周辺に広がる創造活動によってまかれた種が、やがてその枝を伸ばして大きな木となることを願いながら、展覧会だけにとどまらず、多岐にわたる事業を手がけています。

2020年度は新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大の影響により、緊急事態宣言発令下の臨時閉館や、予定していた展覧会の延期・中止・変更をはじめ、次々に起こる新たな問題や変化への対応に追われる1年となりました。7本の展覧会を無事に開催できましたが、それぞれの当初の計画からは内容を少なからず変更しなければなりませんでした。特に、海外在住のアーティストの関わる展覧会は全て遠隔作業で準備を進めざるを得ず、毎年何らかの形で実施してきた国際的に活躍するアーティストと京都の若手アーティストたちとの直接的な交流の機会が失われてしまったことは残念でなりません。しかし、このような状況においても止まることなく、いま@KCUAとして可能なこととは何かを模索する日々が続いています。

See p. 31

2020.8.8 Sat.–8.30 Sun.

道にポケット

See p. 47

2020.9.12 Sat.–10.25 Sun.

京都市立芸術大学創立140周年記念／開館10周年記念展

京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展／横内賢太郎「誰もに何かが（Something for Everyone）」

See p.37

2020.8.8 Sat.–8.30 Sun.

おおんなーれ 現代アートをいっしょに展示する企画展

See p.51

2020.11.7 Sat.–12.20 Sun.

バシェ音響彫刻 特別企画展

See p. 55

2021.1.30 Sat.–3.21 Sun.

グスタフソン＆ハーボヤ「Becoming——地球に生きるための提案」

See p. 15

2021.3.27 Sat.–4.11 Sun.

京都市立芸術大学退任記念展
堀口豊大「日本という場所」

See p. 68

SPECIAL EXHIBITIONS

Curated by
Kyoto City University of Arts
Art Gallery @KCUA

特別展

「特別展」とは、@KCUA学芸スタッフの企画による展覧会です。芸術を育む場所である芸術大学のサテライト施設＝発信拠点である@KCUAでは、作品について「考える」「作る」プロセスを公開する場として、また大学だからこそ可能な先駆的・実験的な事業を展開しています。京都市立芸術大学の卒業・修了生を中心とした若手アーティストの支援、国際的に活躍するアーティストの創造と実践に触れる機会の創出、研究に根差した高い専門性を持つプロジェクト、また2023年に予定された大学キャンパス移転に向けたプロジェクトなど、多種多様な企画に取り組んでいます。

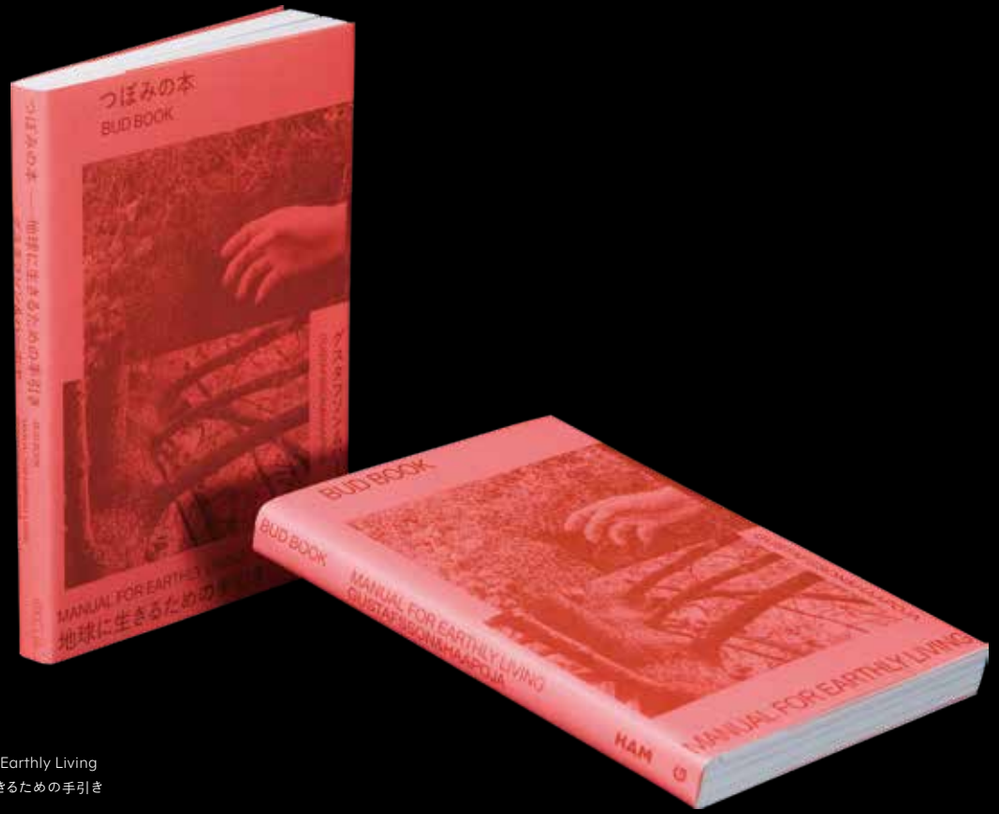
グスタフソン＆ハーポヤ
「Becoming——地球に生きるための提案」
Gustafsson&Haapoja: *Becoming — Proposals for Earthly Living*

2021.1.30 Sat.–3.21 Sun.

フィンランド出身の美術家のテリケ・ハーポヤと著述家であり脚本家、劇作家でもあるラウラ・グスタフソンによる学際的ユニット「グスタフソン＆ハーポヤ」は、人間を中心とする世界観から生じる問題に焦点を当て、より包括的な社会概念への道を開くことを目指して、大規模で長期的なプロジェクトに取り組んでいる。日本で初の個展となる本展「Becoming——地球に生きるための提案」の中心となる映像作品《Becoming》（2020）で、グスタフソン＆ハーポヤは、人類と生命体が公平で持続可能な未来を作り、育てることができるようにするためにはいかにあるべきかを問いかける。海の見える穏やかな場所や緑豊かで静かな森、街の中、あるいは室内などのさまざまな場所で、活動家や思想家、アーティスト、介護者、子どもたちなどの37名の回答者は、人間の暮らしにとって有意義なあり方をめぐる数々の問いの中から、いま芽ぐみつつあり、かつ育くむべき現象について、それぞれの考えを語る。避けがたい変化の中でどのように生き、行動するべきなのか——。

《Becoming》（2020）

A rice field is a real ecosystem



Bud Book—Manual for Earthly Living
つぼみの本——地球に生きるための手引き

《Embrace Your Empathy!》(2016)

Gustafsson&Haapoja グスタフソン＆ハーポヤ
ニューヨークを拠点とするビジュアルアーティストのテリケ・ハーポヤと、フィンランドを拠点とする著述家であり脚本家、劇作家でもあるラウラ・グスタフソンによる学際的ユニット。2012年に開始した二人のコラボレーションは、人間以外の種の観点から歴史と社会を探求するプロジェクトから始まり、人間と動物の概念を解体し、それらが人種化や性差別、社会的排除のメカニズムといかに関連しているかという試みへと展開してきた。グスタフソン＆ハーポヤの全作品に通底するのは、ユートピアの思想や別の世界の可能性といったテーマである。詩的なアプローチと記録資料を融合させ、インスタレーションや映像、パフォーマンスなどの表現手法を組みあわせた作品を手がける。それらの作品からは二人が演劇のバックグラウンドをもっていることがうかがえる。また、コラボレーションにおいて強調されるのは、エッセイやディスカッション、アクティビズムを通して、プロジェクトと身の回りの現実を結びつけることの重要性である。過去のインスタレーション作品に《The Museum of the History of Cattle》（2013）、《Museum of Nonhumanity》（Finnish State Prize for Media Art受賞、2016）がある。主な作品にサウンド・インスタレーション《Waiting Room》（オランダで初公開、2019）、法廷を舞台にしたレクチャー・パフォーマンス《The Trial》（Baltic Circle国際演劇祭、2014）がある。

Laura Gustafsson ラウラ・グスタフソン（1983年生まれ）
ヘルシンキを拠点とする著述家、脚本家、劇作家。文学作品の他に、戯曲やラジオドラマ、テレビドラマを執筆する。主な著作に『Huorasatu』（英題「Whorestory」、2011）、『Anomalia』（英題「Anomaly」、2013）、『Korpisoturi』（英題「Wilderness Warrior」、2016）、『Pohja』（英題「Ground」、2017）がある。

Terike Haapoja テリケ・ハーポヤ（1974年生まれ）
ニューヨークを拠点とするビジュアルアーティスト。展覧会で作品を発表する他、作家や大学講師としても活躍。主な作品に《Closed Circuit – Open Duration and The Party of Others》（「ヴェネチア・ビエンナーレ」ノルディック・パビリオン、2013）がある。

化学者のパウル・クルッツェンが、現代を人間の行動によって地球の地質や生態系に重大な影響を及ぼす「人新世」と名付けたのは2000年、人間と自然や全ての種の生物とのより良い関係、共生のあり方を考えることの必要性が問われ続けて久しい。また、ずっと以前から、多くのアーティストたちがすでに「人新世」における人間のあり方と未来を問う作品をいくつも発表してきていた。古くから、芸術は社会への新しい視点を常にもたらすものであった。新型コロナウイルス感染症のパンデミックという世界全体を揺るがすような大事件は、複数のアーティストたちによる実践と世界の状況とを真に結びつけて考えるための補助線となるかもしれない。

2020年度の@KCUAでは、2019年度のジェン・ボーとのより良き生態学的未来を探るプロジェクトから問題意識を引き継ぐ形で、ビジュアルアーティストのテリケ・ハーポヤと、著述家、脚本家、劇作家のラウラ・グスタフソンによる学際的ユニットであるグスタフソン＆ハーポヤを招聘した。グスタフソン＆ハーポヤは、歴史が生み出してきた社会的格差や現代社会の抱える問題点を背景として、人間以外の種の視点からあらためてその歴史について考察し、より良き未来を模索するための問題提起を行ってきた。「人間」と「非人間」の区別の歴史に着目し、それらと外国人排斥、性差別、人種差別、トランスフォビア、そして自然や他の動物からの搾取などの問題とのつながりを示唆した大規模なインスタレーションとレクチャーシリーズから成る《The Museum of Nonhumanity》（2016–）は、コンセプトが優れているのはもちろん造形的にも非常に完成度の高い作品で、国際的に高い評価を得て世界各地で紹介されている。

2021年1月に開幕した展覧会「Becoming ――地球に生きるための提案」の中心となった《Becoming》（2020）は、人間であるために、そして地球に生きるために不可欠なものを、活動家や思想家、アーティスト、介護者、子どもたちなどの37名の回答者に尋ねるインタビューを編集した3時間超の映像作品である。インタビュー自体は2019年に実施されたものだが、その内容はパンデミックによる社会状況の変化に翻弄され、疲弊し、しかし生きるためにどのようにふるまうべきかを改めて考えていた人々の心には、ささやかながらも深く響いたことだろう。《Becoming》でのインタビューをもとに編纂された『つぼみの本――地球に生きるための手引き』（pp. 22–23に書影、p. 76に詳細。以下、『つぼみの本』）で回答者の一人であるアンナ・モロッタヤは「穏やかな心でいる」ためには心を鎮める時間を取り、自らの心に耳を傾けることだと語る。そして「おそらく人間や人類全体は、自らを根本から見つめ、よく知り、それから周りの他者を見つめることのできる場所をとりわけ必要としているのでしょう。また、自然や、友人や話し相手としてここで常に私たちとともにあるものにも目を向ける必要があります」（『つぼみの本』、pp. 31–32）と語る。またヤーナ・アイラクシネンは「共存する」ためには「寛容さという考え方を取り入れることで、やりやすくなるかもしれません。違いに対して、ただ寛容で、ときには好奇心を持って接するだけで十分なのです。壁を作ってその中で意見の合う仲間うちに閉じこもることをせずにいられたら、たとえ必ずしも快く楽しいとは限らない、異なる人々や要素、状況が多くあっても、良い人生を送ることがもっと容易になります」（『つぼみの本』、p. 37）と答える。これらの言葉は、陰鬱な気分が蔓延するなかで、他者への不寛容が表面化してしまった現在の状況の中で、より力強く人々の心に訴えかけてくる。

また、合わせて展示された《Embrace Your Empathy!》（2016）は、地球に生きる全ての種との共存のあり方についての「宣言」と、同テーマのもとに作られた旗、映像から成るインスタレーションである。この「宣言」はジェン・ボーとのプロジェクトで有志によって作られた「宣言」とも趣旨が重なり合う。グスタフソン＆ハーポヤにこの「宣言」も共有してみたところ、非常に喜んで関心を寄せてくれた。またジェン・ボーに『つぼみの本』の話をすると是非読みたいとのことで英語版を贈った。これらのやりとりは、私たちの手がけてきた別々のプロジェクトが一本の線で繋がれるようでもあり、国境を越えた移動が困難な状況でアーティストたちと対面でやりとりができず、どうしても淡白で坦々と進みがちな準備作業に彩りを添えてくれるものであった。

同じ場に立ち、時間と空間との両方を共有することが難しくても、共に何かに取り組んでいると実感することは不可能ではない。例えば『つぼみの本』の日本語版の作成は、時間をかけてその内容やデザインと「対話」するような作業であり、対面での「対話」とはまた違った発見や出会いをもたらすものであった。とは言え、このテキストを書いている現在、すでに複数の展覧会を遠隔でのやり取りをもとに実施してきたが、アーティストが不在のなかで展覧会を作るのには不思議な感覚が伴い、まだうまく咀嚼できない状態ではある。しかし2021年7月にCIMAM（国際美術館会議）にて発表された「美術館実践における環境の持続可能性についてのツールキット」*には、関係者の渡航を伴わない遠隔設営の計画という目標項目もあることから、今後の新たなスタンダードの一つにはなっていくことだろう。

コロナ禍の現在、美術だけではなくあらゆる分野において、前に進むためになされている試行錯誤が未来を作っていくとするならば、私たちの周りにはいま、「つぼみ」が溢れていると言えるかもしれない。その「つぼみ」をいかに育てていくのかについては、グスタフソン＆ハーポヤの実践から非常に多くのことを学ぶことができる。アートに何が可能かを問い続けるアーティストたちの営みには、社会を見つめる真摯なまなざしがある。世界がいかに危機に直面しようとも、その営みからは決して目を離してはいけないのである。

（藤田瑞穂／@KCUAチーフキュレーター／プログラムディレクター）

* https://cimam.org/documents/159/CIMAM_Toolkit_on_Environmental_Sustainability_in_the_Museum_Practice._2021.pdf
（最終閲覧日：2021年10月10日）

写真　来田猛
Photos by Takeru Koroda

2021年1月30日（土）–3月21日（日）
グスタフソン＆ハーポヤ
「Becoming——地球に生きるための提案」

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2
開催日数：44日間
入場者数：941人
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：京都市立芸術大学
助成：芸術文化振興基金助成事業
　公益財団法人野村財団
　公益財団法人吉野石膏美術振興財団
後援：フィンランド大使館

京芸 transmit program 2020

KCUA Transmit Program 2020

菊池和晃、小嶋 晶、西久松友花、宮木亜菜
Kazuaki Kikuchi, Aki Kojima, Yuka Nishihisamatsu, Ana Miyaki

2020.4.4 Sat.–7.26 Sun.
（新型コロナウイルス感染拡大予防のため2020年4月11日（土）–6月1日（月）まで臨時休館）

宮木亜菜 Ana Miyaki

西久松友花 Yuka Nishihisamatsu

菊池和晃 Kazuaki Kikuchi

小嶋 晶 Aki Kojima

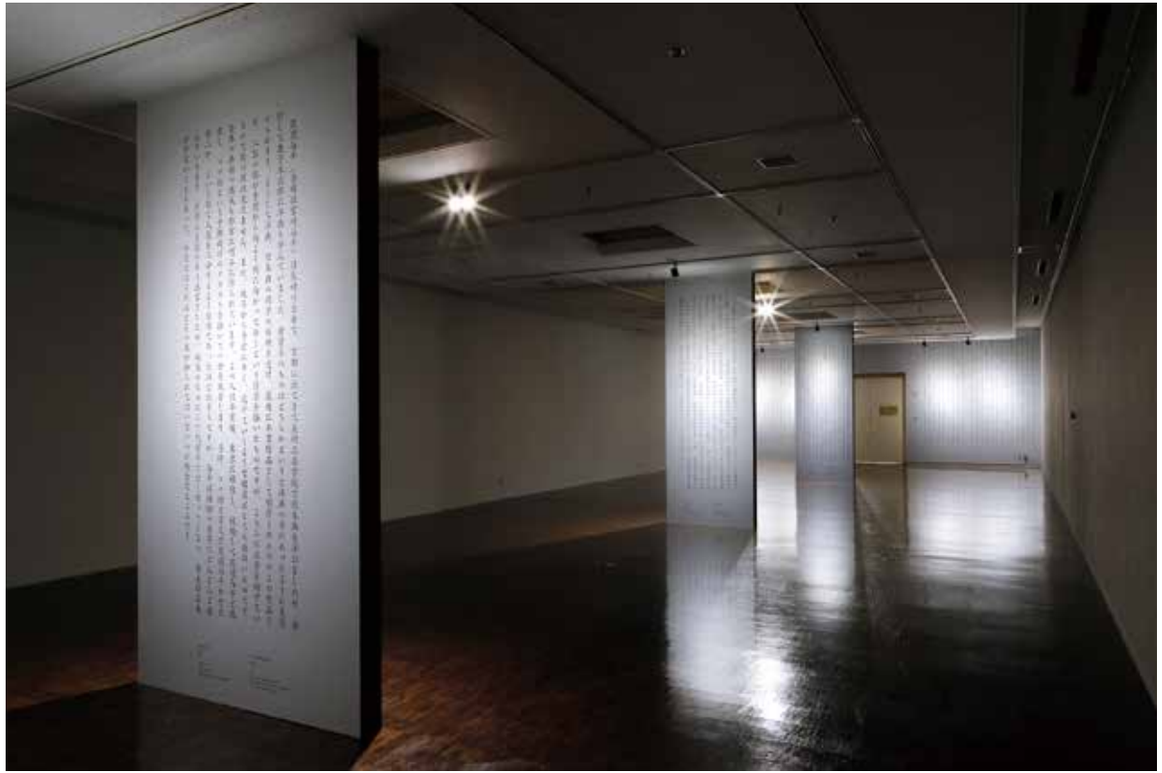
「京芸 transmit program」は、アーティストの活動場所として日本でも1、2を争う都市京都における期待の新星を紹介するシリーズとして、京都市立芸術大学卒業・大学院修了3年以内の若手作家の中から、いま、@KCUAが一番注目するアーティストを紹介するプロジェクトである。第4弾となる本年は、菊池和晃（構想設計）、小嶋晶（油画）、西久松友花（陶磁器）、宮木亜菜（彫刻）の4名を選出した。

写真　来田猛
Photos by Takeru Koroda

2020年4月4日（土）–7月26日（日）
（新型コロナウイルス感染症拡大予防のため2020年4月11日（土）–6月1日（月）まで臨時休館）
京芸 transmit program 2020

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2
開催日数：54日間
入場者数：579人
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
・4月4日（土）
　オープニングイベント（開催中止）
・宮木亜菜 パフォーマンス
　6月14日（日）、21日（日）、28日（日）、7月5日（日）、12日（日）、19日（日）、26日（日）各日13:00–17:00



横内賢太郎

Artist Support Project

写真　来田 猛
Photos by Takeru Koroda

異文化との接触やコミュニケーション、またそれらがもたらすものについて、京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品、また横内賢太郎の現在進行形の実践と思考の中に見出すことを試みるべく、二つの展示がパラレルに展開する。
1階では京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展として、1903年の京都市紀念動物園（現在の京都市動物園）開園や、欧州視察で知見を得た当時の教員から学んだ西洋画表現などの「出会い」とその受容のあり方を、入江波光（1887–1948）、渡辺与平（1889–1912）、村上華岳（1888–1939）の3名の画家の卒業作品を軸として考察した。
2階の横内賢太郎「誰もに何かが（Something for Everyone）」では、「文化的接ぎ木」をキーワードに、さまざまな文化的・歴史的背景を持つイメージを画面上で再接続した絵画作品とともに、2014年にインドネシアに移住した後、自身の絵画による実践とは別の形で文化と交流について考えるべく運営してきた「Artist Support Project」のアーカイブも展示し、横内が異文化に属する文物のイメージの接続、人々の交流についてどのように思考を巡らせているのかを包括的に紹介した。

2020年9月12日（土）–10月25日（日）
京都市立芸術大学創立140周年記念／開館10周年記念展
京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展／
横内賢太郎「誰もに何かが（Something for Everyone）」

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2, Gallery A, B, C
開催日数：38日間
入場者数：1,094人
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
企画協力：長坂有希（京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展）
Artist Support Project 関連展示協力作家：
D.D.（今村 哲・染谷亜里可）、菊池聡太朗、古橋まどか、安田 葉、P(art)Y LAB、松本散歩、Huda Tula
主催：京都市立芸術大学
助成：京都市立芸術大学特別研究助成 2020-006
協力：ケンジタキギャラリー

関連イベント
・9月26日（土）19:00–20:30
　トークイベント1　オンラインのみ
　puntWG（アムステルダム、オランダ）との共同開催
・10月3日（土）19:00–20:30
　トークイベント2　オンライン同時配信
　ゲスト：mamoru

KCUA OPEN CALL EXHIBITIONS

申請展

「申請展」とは、京都市立芸術大学の修了生・卒業生・教職員・在学生を対象とした企画公募により、@KCUA運営委員会による審査を経て選出された展覧会です。大学の附属施設である@KCUAでこそ実施可能な実験精神に溢れた企画や、若手作家による意欲的な企画などが優先して採択されています。

（前年度9月に公募を実施）

マニラを拠点として活動する「Load na Dito」（本展協力者）のプロジェクトの一つである「Flex*」という、単語を連鎖させるゲーム（話の中で出た単語をキーワードにし、次の人が話を紡いでいく）を使って、偶発的に他者の思考と出会うことから制作をはじめた参加作家の作品を展示。先出の単語に連想を連ねた上で選択される言葉とその語りからは、それぞれの見ている景色やそこに潜む問題意識がふんわりと見えてくる。未来の予測の困難な現在の状況で、他者に出会い、個々の意識を構築する興味深い試みを通して、表現へ至る様々なざわめきや揺らぎを自他ともに受け入れて、創造から広がる様々なつながりを改めて探していくさまを描く。

2020年8月8日（土）–8月30日（日）
道にポケット

展示室：@KCUA 1
開催日数：20日間
入場者数：1,155人
主催：京都市立芸術大学
協力：Load na Dito

関連イベント
- 8月16日（日）16:00–18:00
  トークイベント「Pickpockets マニラ ／ ストリート ／ アート」
  ゲスト：ヌノ・アルフォンソ、ポクロン・アナディン
- 8月8日（土）16:00–
  ワークショップ「工作とインストール」笠間弥路
- 8月15日（土）16:00–
  ワークショップ「らくがきワークショップ」長門あゆみ
- 8月22日（土）16:00–
  ワークショップ「ソックモンキーと散歩する」村上美樹
- 8月29日（土）16:00–
  ワークショップ「Tulving」クニモチユリ
  ゲスト：コニシムツキ

写真　大島拓也
Photos by Takuya Oshima

写真　大島拓也
Photos by Takuya Oshima

おかんアート（おかんは関西弁で母親の意）とは、主に中高年婦人が余暇を利用して製作する手芸作品や創作活動全般のことであり、単に「母の作る手芸作品」を指すと同時に、いらないもの（もらって置き場に困るもの）・センスの悪いもの（もっさりしたもの）といった、残念な意味合いで使われることも多い言葉でもある。本展では、おかんアートに見られる表現の面白さに注目しながら、おかんアート的な手法や雰囲気を持ち合わせる現代アートの作品を合わせてピックアップ、それらを区分けせずに展示し、おかんアートと現代アート、それぞれの文脈や属性があいまいに溶け合いながら、表現そのものの面白さが見え隠れする空間が生み出された。

2020年8月8日（土）–8月30日（日）
おかんアートと現代アートをいっしょに展示する企画展

展示室：@KCUA 2
開催日数：20日間
入場者数：1,082人
主催：京都市立芸術大学、おかんアートと現代アートをいっしょに展示する企画展実行委員会
助成：京都市文化芸術活動緊急奨励金
京都府文化力チャレンジ補助事業
企画：フジタマ、下町レトロに首っ丈の会 伊藤由紀
山下 香（代表）

関連イベント
・8月9日（日）14:30–
出品作家達がゆるっと在廊
・8月18日（火）13:00–
トークイベント「下町レトロに首っ丈の会とおかんアート10年の歩み」

「バシェの音響彫刻」とは

・

ベルナール・バシェ（1917–2015）、フランソワ・バシェ（1920–2014）の兄弟によって考案された音の鳴るオブジェである。ニューヨーク近代美術館（MoMA）、パリ装飾芸術美術館など世界各地で活発に展覧会や演奏会が開催された。1970年の大阪万博において、鉄鋼館のディレクターであった作曲家・武満徹から音響彫刻の製作を依頼されたフランソワ・バシェは、来日して17基の音響彫刻をつくった。1基1基すべて形状が異なる作品は、響かせるサウンドもさまざまで、誰もが音を出して楽しむことができるものであった。しかし万博閉幕後、音響彫刻はすべて解体され、倉庫に保管されたまま世の中から忘れられていった。約40年後の2010年、旧鉄鋼館が「EXPO'70パビリオン」として再開するのを機に、音響彫刻を修復・復元する計画が進み始めた。現在までに6基が修復され、音の出せる状態で保管されている。

解説：岡田加津子

（京都市立芸術大学音楽学部作曲専攻教授）

渡辺フォーン

（2015年に京都市立芸術大学にて修復・復元）

・

妖怪ぬりかべのような一枚板の巨大な拡声盤を広げて、うぬっ！と立ちはだかっている。拡声盤の前にある19本の金属棒を打ったり擦ったりすると、低く重く深い音色が得られるほか、スーパーボール奏法により草食恐竜が互いに鳴き交わすかのような声も聞ける。

桂フォーン

（2015年に京都市立芸術大学にて修復・復元）

・

18本の金属棒、13枚の金属板、8本の弦、5つのコーン（円錐形の拡声盤）、5枚のフラワー（平たい拡声盤）、たくさんのヒゲ、謎の渦巻き……一体にして博覧会のような華やかさと賑わいを持つ音響彫刻のスター。これほどまでに様々な可能性を一つの身に併せ持ったバシェ音響彫刻は、世界に桂フォーン、ただ一つである。

勝原フォーン

（2017年に東京藝術大学にて修復・復元）

・

仰ぎ見るような大型の音響彫刻だが、発音体は竪琴のように張られた弦で、優しい繊細な響きを放つ。ときにはレバーによって響きを変調できるところも魅力。振動が伝わると、12枚の大きな木の葉型の拡声盤が一斉にユッサユッサと揺れ、そのさまは森がざわめき、自然界の魂と呼応しているかのようだ。

高木フォーン

（2013年に川上格知とマルティ・ルイツにより修復・復元）

・

表側（外側）はギラギラと波打つ5枚の拡声盤が砦を築き、裏側（内側）には65本のガラス棒がひしめいている。EXPO'70ではおそらくきっちり半音階が鳴るように調律されていたのだろう。しかし50年を経たいま、高木フォーンからドレミなどという生易しい音は発せられない。聞こえるのは慟哭にも似た声であり、訴えである。

川上フォーン

（2013年に川上格知とマルティ・ルイツにより修復・復元）

・

EXPO'70で実際に制作に携わった川上格知の名前が付けられている。2013年再び陽の目を見た音響彫刻。9枚の分厚いカーボン紙の拡声盤を持ち、バシェ・カラーの赤と黒のコントラストが鮮やか。18本の寸切棒とヒゲのほか、3本の重いスプリングがぶら下がる。その重厚な響を身体に浴びると、まるで雷に打たれたように動けなくなる。

パレット・ソノール

・

バシェの考案した全14種類からなる教育音具（愛称：パレット・ソノール）。その名の通り、色とりどりの響を持つ。赤、青、黄、緑、黒と色鮮やかなスゲ笠型の共鳴体も可愛らしく、一度触ると子どもも大人もたちまち魅了され、時間を忘れて遊んでしまう。

Ryuichi Sakamoto Prototype

・

2017年勝原フォーンを修復する際に行われたクラウド・ファンディングのリターンとして、東京藝術大学とマルティ・ルイツとによって共同制作されたプロトタイプ(試作品)。2作目が音楽家・坂本龍一の元にある。10本のガラス棒に濡れた指で触れると、美しい響きが立ち昇る。

冬の花

・

2015年バシェの音響彫刻を修復するために来日したマルティ・ルイツの提案で開かれた、彫刻専攻+作曲専攻合同ゼミにおいて3台制作された、小型の音響彫刻。それぞれ5本のガラス棒と1枚の拡声盤を持ち、バシェの音響彫刻の構造がもっともシンプルな形で表現されている。

アンサンブル・ソノーラ

・

バシェの音響彫刻をこよなく愛する４人の音楽家、
岡田加津子（作曲家）、北村千絵（ボーカリスト）、
沢田穣治（作曲家・ベーシスト）、渡辺亮（パーカッショニスト）によるユニット

2020年11月7日（土）–12月20日（日）
バシェ音響彫刻 特別企画展

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2
開催日数：38日間
入場者数：3,128人
主催：京都市立芸術大学
企画：京都市立芸術大学芸術資源研究センター
　バシェ音響彫刻プロジェクト
共催：東京藝術大学ファクトリーラボ
助成：2020年度 日本万国博覧会記念基金事業助成
協力：大阪府、バルセロナ大学、万博記念公園マネジメント・パートナーズ（BMP）、L'association STRUCTURES SONORES BASCHET（フランスのバシェ協会）、バシェ協会（日本）

関連イベント

・11月7日（土）15:00–
　オープニングコンサート
　出演：渡辺 亮（パーカッショニスト）＋袋坂ヤスオ（舞踏家）、アンサンブル・ソノーラ（岡田加津子（作曲家）、北村千絵（ボーカリスト）、沢田穣治（作曲家・ベーシスト）、渡辺 亮）
・11月8日（日）13:00–
　ギャラリートーク「バシェ音響彫刻 よみがえる響き、ゆらめく身体」
　出演：岡田加津子（京都市立芸術大学音楽学部教授）、川崎義博（京都市立芸術大学芸術資源研究センター客員研究員）、三枝一将（東京藝術大学美術学部非常勤講師／藝大ファクトリーラボ ディレクター）
・11月8日（日）14:00–
　ミニコンサート
　出演：アンサンブル・ソノーラ
・11月14日（土）15:00–
　若手作曲家によるコンサート
　出演：田中詩也、土方渚紗、下村 景（京都市立芸術大学音楽学部作曲指揮専攻）、小宮知久（作曲家／東京藝術大学芸術情報センター）、福井麻衣（ハービスト）、丹治 樹（京都市立芸術大学音楽学部打楽器専攻）
・11月15日（日）15:00–
　アーティスト・パフォーマンス
　出演①：黒川 岳（アーティスト）
　出演②：鈴木昭男（サウンド・アーティスト）、宮北裕美（ダンサー・アーティスト）
・11月20日（金）14:00–
　ゲストコンサート
　企画：沢田穣治
　出演：アンサンブル・ソノーラ、おおたか静流、yoshitakeEXPE
・11月21日（土）14:00–
　子どものためのサウンド・ワークショップ
　講師：岡田加津子、北村千絵、渡辺 亮
　協力：京都子どものための音楽教室
・11月22日（日）16:00–
　国際シンポジウム「子どもは身体で音を聴いている——各国における活動報告」
　出演：ピエール・キュフィニ（フランスバシェ協会会長、ベルナール・バシェ 元アシスタント）、フレデリック・フラデ（フランスバシェ協会理事長）、マルティ・ルイツ（サウンド・アーティスト、バシェ研究者）、ヴァンサン・ブシャール・ヴァロンタン（ケベック大学モントリオール校 音楽学部教授）、川崎義博、三枝一将、岡田加津子
　通訳：北村千絵、土山亮子
・11月23日（月・祝）15:00–
　コンサート「よみがえる響き、ゆらめく身体」
　出演①：岡田加津子、岩田小桃、高井梨緒（コントラバス）出演②：角 正之（ダンサー）、川崎義博（サウンド・アーティスト）出演③：アンサンブル・ソノーラ、桑鶴麻氣子（朗読）、升田 学（ダンサー）
・12月5日（土）14:00–
　音響彫刻制作ワークショップ
　講師：川崎義博
　主催：N.U.I.project
・12月12日（土）19:00–
　オンライン無料Live配信特別コンサート
　出演：アンサンブル・ソノーラ
　演出・配信：N.U.I.project
・12月13日（日）14:00–
　コンサート「開花した音響彫刻——奏でる美術家と描く音楽家」
　出演：アンサンブル・ソノーラ（沢田穣治、渡辺 亮、岡田加津子）、山口和也（美術家）
・12月19日（土）13:00–／15:00–
　みんなのためのサウンド・ワークショップ
　講師：岡田加津子、川崎義博、渡辺 亮

写真　来田 猛
Photos by Takeru Koroda

KCUA EXHIBITIONS

2021.3.27 Sat.–4.11 Sun.

京都市立芸術大学退任記念展

堀口豊太「日本という場所」

Toyota Horiguchi Retrospective Exhibition: *A Place Called Japan*

環境デザインは、自分をめぐる環境というものを意識し、それをみなのためにどうすれば良くできるのか、という問題について考え作案する領域です。備品、家具、内装、外装、建築、外構、造園、都市、田園、自然などと、規模や範囲は異なっても、それは最終的には公益に向けて個人がどのように貢献できるのか、といったことを探るのを目指しています。それは可能世界に目を向けるものです。それに対して、写真という芸術は、現実世界に目を向けるものです。此処にこういう物がある、此処にこういう場所がある、ということ自体の不思議と面白さを見せてくれます。世の中を良くしような

どという公益の目的をもたず、私たちが何を見ているのか――より的確にいえば、何を見ているようで見ていないのかを示してくれます。興味のないものですら興味深く見せてくれます。この二つの相反する領域の間を行ったり来たりすることによって、その緊張関係の中から、それぞれの意味が私にとってより明らかになりました。日本という場所がもつ問題も面白さもより明らかになりました。 今回の展覧会を通し、その過程の一部を少しでもみなさまと共有できればと思っています。（堀口豊太）

写真　堀口豊太
Photos by Toyota Horiguchi

2021年3月27日（土）–4月11日（日）
京都市立芸術大学退任記念展
堀口豊太「日本という場所」

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2
開催日数：14日間
入場者数：453人（3/27–31：93人｜4/1–11：360人）
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
・ 4月10日（土）15:00–
　ギャラリートーク

特別展｜Special Exhibitions

1 京芸 transmit program 2020
デザイン：仲村健太郎｜Designed by Kentaro Nakamura

2 京都市立芸術大学創立140周年記念／開館10周年記念展
京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展／横内賢太郎「誰もに何かが（Something for Everyone）」
デザイン：松本久木｜Designed by Hisaki Matsumoto

3 グスタフソン＆ハーポヤ「Becoming——地球に生きるための提案」
デザイン：仲村健太郎｜Designed by Kentaro Nakamura

1　A4版フライヤー

2　A5中綴じ冊子

3　A5変形・巻き巻き4つ折りリーフレット

4　A4版フライヤー

5　A4版フライヤー

6　A4版2つ折りフライヤー

7　A4版フライヤー

申請展
KCUA Open Call Exhibitions

4 道にポケット
デザイン：白幡裕子｜Designed by Yuko Shirahata

5 おかんアートと現代アートをいっしょに展示する企画展
デザイン：フジタマ｜Designed by Fujitama

6 バシェ音響彫刻 特別企画展
デザイン：仲村健太郎｜Designed by Kentaro Nakamura

大学事業｜KCUA Exhibitions

7 京都市立芸術大学退任記念展
堀口豊太「日本という場所」
デザイン：今村悦美｜Designed by Etsumi Imamura

書籍｜Books

JOAN JONAS IN KYOTO 2019–2020

判型：B5
寸法：25.7cm×18.5cm×1.5cm
カラー：フルカラー
ページ数：160 pp.

編集：藤田瑞穂
編集補助：岸本光大、西尾咲子
写真：井上義和、来田 猛
装丁・組版：尾中俊介（Calamari Inc.）
印刷：瞬報社写真印刷株式会社
発行者：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日：2020年6月30日

収録内容：橋本裕介「アメリカの前衛芸術史を歩く―最も実り多い時代の当事者に出会って」藤田瑞穂「学びの人、ジョーン・ジョナス」、蔵谷美香「シェイプ・シフティング、ジョナス：《Reanimation》のごく一部を深読みする」、石谷治寛「五つの部屋の憂愁」、インタビュー、展示風景写真、作品図版、作家略歴
言語：日本語、英語

京芸 transmit program 2020

判型：B5変形
寸法：26 × 19.8 × 0.7 cm
カラー：フルカラー
ページ数：64 pp.

編集：藤田瑞穂、岸本光大
編集補助：西尾咲子
写真：来田 猛
装丁・組版：仲村健太郎
印刷：株式会社ライブアートブックス（大伸社）
発行者：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日：2020年8月10日

収録内容：藤田瑞穂「生の痕跡としてのアーカイブ」、展示風景写真、作品図版、アーティストステートメント、参考図版、作家略歴、会場マップ、国枝かつら「京芸 transmit program 2020の作品の現在」
言語：日本語、一部英語

つぼみの本——地球に生きるための手引き
Bud Book—Manual for Earthly Living (Japanese Version)

判型：A5
寸法：15 × 21 × 17 cm
カラー：フルカラー（一部特色）
ページ数：184pp.

編集委員会：グスタフソン&ハーポヤ
ペトロネッラ・グレンロース、ヘリ・ハルニ（ヘルシンキ市立美術館）
編集：ラウラ・グスタフソン、ペトロネッラ・グレンロース
著者：ラウラ・グスタフソン、テリケ・ハーポヤ、藤田瑞穂（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）、ピルッコ・シータリ（ヘルシンキ市立美術館）
日本語版監修：藤田瑞穂
翻訳：［フィンランド語英訳］ミケ・ガルネル
［英語フィンランド語訳］ヴィッレ・コスキヴァーラ
［英語和訳］土山亮子、西尾咲子
写真：映像作品《Becoming》からのスチル テリケ・ハーポヤ ©Gustafsson&Haapoja
デザイン：Tsto
日本語組版：仲村健太郎（Studio Kentaro Nakamura）
印刷：有限会社修美社
発行者：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日：2021年2月20日

収録内容：テリケ・ハーポヤ「いかにして人間になるのか」、ラウラ・グスタフソン「わからないなかで」、手引き
言語：日本語

Dialogue

「動き」を記録する——アーカイブをめぐる対話

片山達貴（映像作家）＋
仲村健太郎（デザイナー／Studio Kentaro Nakamura）＋
藤田瑞穂（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA チーフキュレーター／プログラムディレクター）

藤田：新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起きて以降、さまざまなことが変わってしまいました。@KCUAでは国内の主要な美術館が次々に休館となった2020年3月も、対策を講じながら何とか開館を続けてきたけれど、4月の緊急事態宣言発令で2ヶ月弱を休館せざるを得なくなりました。影響は先に予定していた展覧会にもおよび、延期・中止など年間のスケジュールも変更となりました。また展覧会を再開してからも、他府県の美術関係者や外国人観光客を中心に来場者数が激減してしまい、いつも通りとはほど遠い状態が続いています。

ただ、2020年を振り返って、展覧会の数が減ったからといって、この「REPORT @KCUA」を去年の半分のページ数で発行、とかは絶対したくなかったんですよね。この年はあまり何もできなかった、みたいにしか残らないのはイヤだな、と思って。いろいろな物事が変わってしまったけれど、そのぶんこれまで

とは違う時間の使い方をしてきただけで、活動が止まっていたわけではないですから。

2020年3月に新しいウェブサイトのフォーマットができたところだったので、休館中には記事を上げたり、過去のアーカイブを載せ直す作業をコツコツと進めたり。緊急事態宣言中、さまざまな美術館が展覧会の映像記録を配信し始めたりもしましたし、@KCUAとして活動の記録をどう残すのかということも改めて考えました。片山さんにはジョーン・ジョナス「Five Rooms For Kyoto: 1972–2019」（2019年12月–2020年2月）の記録映像を撮影してもらっていたんですが、片山さんの映像は、ある鑑賞者が展示空間の中で見ている風景を追体験している感じもする上に、客観性と主体性のバランスがすごく良くて、@KCUAのスタンダードにできれば良いな、と思いました。それ以降、「特別展」（@KCUAの学芸スタッフによる企画展。p. 13–参照）の映像記録を片山さんにお願いしています。

片山：映像で展覧会を記録する場合は、カメラの動きが重要だと思っています。どうカメラを動かそうか、というのがそのまま制作方針になるという感じです。映像は写真とは違って、それを撮った人がどういう風に感じて観ていたのかがわかりやすいんじゃないかと思います。実は、アーカイブを撮影するときだけでなく、鑑賞者として展示されている作品を観たりするときにも「この作品が意図しているものは何なのか」と考えるのが苦手なんです。なので「この人は何が楽しくてこんな作品を作っているのだろう」と考えるようにしています。そうすることで作品から体温を感じ、作者のことをより近くに感じられるように思います。理解したいときにその「楽しいポイント」の探し方としては、自分がこの先作ったら何が楽しいか、みたいな感じでしょうか。ジョーン・ジョナスの展覧会の撮影は、こう撮ったら良くなりそうというポイントが、ポンポンポンっと浮かんできて、導かれるようにして撮影できたんですよね。そんな感覚は初めてでした。

藤田：映像は本当に全部素敵だったんですけど、その中でも特に良いなと思ったのが、《Lines in the Sand》というインスタレーションの映像です。インスタレーションの構成要素としてメインになる映像は22分30秒あるんですが、全部で5部屋ある展覧会の、10分程度のアーカイブ映像で見せるとしたら本当にちょっとしかない。どういうシーンが切り取られるのかなと思いながらサンプルの映像を見せてもらったら、犬がフープをバッとくぐるシーンが選ばれてて、それがすごく印象的だったんですよ。「すごい、これは良い！」と。

片山：（ジョナスが）犬が好きっていう情報が一番強く印象に残っていたんで（笑）一つはリズムが作りやすかったというのもありますね。流れを作るための。もう一つはあの作品が撮られた時代の関係で映像の質感がいまとは異なっていることがわかりやすかったからというのもあります。一言でいうと映像の中の犬のブレ感が面白かった。それは、最新のアニメやCGとは大きく異なる部分じゃないかなあと思います。いかにも実写映像らしい質感があの瞬間にはあります。それを現代の映像機材で撮影することも面白かったです。

ジョーン・ジョナス「Five Rooms For Kyoto: 1972–2019」
記録映像からのスチル

藤田：鑑賞者の立場から考えると、映像の展示って、冒頭にタイミングを合わせて入るシステムになっているものでなければ、たいていの場合途中から観ることになります。しかも、一つの展覧会に複数の映像があったりすると、それら全部を観る人も少ないんですね。観ているときにちょうど印象的なシーンに出会ったらそのまま観てしまう場合もあるけれど。そんな中で、片山さんが印象的に感じたのであろうシーンをそのまま入れている感じがすごく良いなと思ったんです。

仲村：客観的な解釈だけではなく、良いなと解釈したシーンが入っているのが片山さんの映像の良いところですよね。藤田さんはそういったアーカイブがどんな意味があると思いますか？

藤田：展覧会そのものを見ていない人に「あ、この展覧会行きたかったな」と感じてもらえるようなアーカイブ映像を残そうとするなら、撮った人が「このシーンは良いな」と思ったところを出すべきだと思います。写真だったら、写真家の人がこれ

だと思ったフレーミングでしか撮らないですから、それと同じではないでしょうか。限られた時間、枚数で伝えるためには、ある意味でそこは直球で良いと思うんですよね。

仲村：写真家やビデオグラファーなどの記録を担う人、またアーカイブとしての印刷物を作るデザイナーには当事者性を持って、自分自身の視点を盛り込む人と盛り込まない人がいると思うんですが、@KCUAに関わる人たちは盛り込む側の人、展示内容に踏み込んでいる人が多いような気がします。

藤田：どこか忘れられないような、何かしら強い印象を与えるものを作りたいし、残したいというのはありますね。@KCUAは美術館ではないし、規模も大きくないので、展示をしている作家だけでなく、展覧会にさまざまな形で関わる人も含めて、作っている人の顔が見えるようにしたいんです。例えば展示だったら、作品以外から別の一面が見えることで、作家が作品を作る誰かではなくて、ちゃんと一人の人間として見えるようになったら良いな、と思っています。そして、映像は特に動きがあるものなので、撮っている人の存在感がある方が、生っぽいというか。片山さんが捉えた映像は、レンズに映ったものじゃなくて、生身の人が見たもの、という感じがするんです。展覧会を見るとき、人は近寄りたいものがあったら近寄るし、引きで見たかったら引くし、ずっと動いているはずなんですよね。

片山さんの映像にはそれが自然に出ている。美術館の展示とは違って、完成品としてガラスケースに入れられる前のものを見せられたら良いなと常に思っていて。例えばまだ焼き立てだから紙の袋に入っていて、しばらく上を閉めちゃダメ、っていうパンを売りたいという感じ。そこに片山さんの映像に対する考え方がフィットする感じがするんです。

仲村：確かにもっと大きい規模の施設になると、展示を伝えたり残したりする際にもバランスの取れた構成で、客観的な視点から作られたアーカイブが多い印象です。@KCUAのアーカイブは単なる作品の複製ではなく、その作品の文脈をどこまで掬い取れるか？　という視点で、写真家やビデオグラファーに依頼されているるのかなと思いました。@KCUAでは学生から国際的に活躍するアーティストまで、さまざまなラインナップの展示が並ぶかと思うんですけど、扱い方はものすごくフラットですよね。作家の個人的な人間としての側面も拾い上げたりしながら、どのようにして作家性や展示されたものの文脈を接続させていくかみたいな視点をいつも感じます。

客観的なアーカイブ、例えば作品のサイズとか素材とか、データ的な記録の方が意味はあるのかもしれないけど、一方でそういったひっかかりのないデータがどんどん溜まっていってしまうと、あとからアーカイブをどう見い出していけば良いのかわからなくなってしまう。「たねまきアクア」(@KCUAの広報誌。不定期発行)やこの「REPORT @KCUA」、@KCUAのウェブサイトは、さまざまな文脈を指し示すきっかけだけを用意しておいて、あとはアーカイブを見た人が、次にそれを何かしらの形で活用されれば良いと考えて作ってきました。アーカイブに展示に関わる人の主観的な解釈が仕込まれているかどうかが、時間が経って忘れられそうになられたときにすごく意味があるのかな、と考えています。

片山：アーカイブって記録文書の保管書が語源ですよね。役所とか、いまの図書館もそうかもしれない。映像記録は記録で、アーカイブ映像とは違ったものだとすると、僕が撮っているのはアーカイブ映像の方です。あらゆるものが素材化するのが映像の特徴だとして、映像展示だったら音で繋げたりという選択ができるんですけど、絵画とかの展示の場合だとそういう選択肢がないですよね。なので、絵に何が描かれているかによって繋げていくのですが、それはカタログを作っている感じにも近いかもしれないです。

藤田：情報の編集の仕方はいろいろあるけれど、お話をお聞きすると、片山さんが司書みたいな感覚で映像を作っているというのがよくわかります。どこかの視点から撮った記録ではなくて、「この映像、ここが面白かったですよ」みたいな紹介をしてくれる。片山さんは、アーティストとしても、仕事としても映像を作っていると思うんですが、ご自身の中での明確な違いってどのあたりにありますか？

片山：学生の頃は写真作品を作っていたんですけど、どうも自分には写真は合ってないなとうすうす感じていて。それで、だったらカメラの中に自分が入ろうって思ったのが、映像作品を作り始めるきっかけだったんです。それはずっと変わっていなくて、作品を作っているときは、自分自身が映像の中側に入って何ができるかを考えているんです。それが仕事だと、自分自身が映像の外側にいながら何ができるかを考えているので、自分がレンズの前と後ろに居るかが、仕事か制作かの棲み分けになっている。

仕事の映像はカメラを動かしたりしますけど、作品ではカメラは固定することが多い。風景を撮るにしても、個々を撮ったり、寄りで撮ったりしていろいろな素材があって、声や効果音

やテキストとともに編集で一つになるとして、仕事だったら素材の数が増やせれば増やせるほど詰め込みたいという感じですけど、制作だと逆ですね。要素をできるだけ絞って、シンプルにできないかなというのを試している感じはありますね。
アーカイブ映像を撮っているときに、自分がどういう身体の動かし方をしているかとか、どういう行為をしているのかというのを客観的に見て、別のやり方で作品に応用しようかを考えてみたりすることもあります。

仕事で撮影した映像を、撮影したカメラで、撮影した現場で再生するという行為が面白いなと思って、それをそのまま作品にしたりしたこともあります。素材に対する考え方が異なっているんだと思います。使うものと観察するものみたいな感じで。カメラの中にある映像はもちろんまだ未編集の状態なんですけど、それをPCに入れずカメラ越しで見るときって、生きて動いているものを見るような感じがして面白いんです。
そうやって、実写表現の可能性を探っていっている感じです。そう考えると「動き」が自分の作品と仕事をつなぐものかもしれないですね。

藤田：仲村さんにとってのデザインではどうですか？　普段クライアントがいるデザインの仕事をされていますが、ご自身でリトルプレスとして小さな本を作ったりされるときの違いとか、発見とか。

仲村：私は視覚的な造形にすごくこだわるタイプではなくて、どちらかというとデザインを目に見えるコミュニケーションだと思っているんです。「喋る」とか「話す」のに近い感じでしょうか。仕事の場合は「伝える」「広める」「残す」ことが主な目的になるので、そのために対象を解釈することが仕事の中で一番面白いところだと思っています。

また、自分の制作でもクライアントワークでも、コミュニケーションそのものが問いのきっかけになっています。例えば、以前ボディ・ランゲージの本を作ったんですが、誰かと話をしているときに、話している言葉そのものの意味だけじゃなくて、無意識のうちに合わせた手の仕草とか、声色とか姿勢とか、状況によって別の意味が出てくることってありますよね。そういう意味の広がりというか、多層性みたいなものに興味があるんです。仕事で取り組むプロジェクトでも「これはこうだそうです！」みたいな受け身の伝聞的なコミュニケーションよりは、「これはどうやらこうらしい、この人はこう言っている、自分はこう思う」とか、いろいろな人の解釈を混ぜ込んで、意味が重なり合っていって、意味をテキストで書くには不可能な状態にまで持っていきたいと思っています。造形のカッコ良さから始まる、という感じではないですね。

片山：仲村さんのお話を聞いて、もしかして自分はこう考えていたんじゃないかと気づいたことがありました。もちろん、展示撮影のときはカッコ良く撮りたいなというのはあるんですけど、格好良い画角とか探して。なんなら、実際の展示よりもカッコ良く見える瞬間があって、それが映像の価値になったら良いなと思っていて。それは、作為的ではあるけれど重要なことだと思います。意識的なのは「映え」ではなく、体感としての吸い込まれていくような感じや、歩き続けてしまうような緊張感などの直感的な部分の再現性です。作品の場合は全然、直感的なカッコ良さ重視では無いですね。どちらかというと、行為自体を記録している感じです。展覧会の記録では映像でその場をあらゆる視点から多角的に撮影してそれらを組み合わせるけれど、作品では限られた視点から撮影する。ライブ配信のアーカイブのように作っていくような感じです。ライブ配信をすると、そこで出てきた映像が結果的に記録になるんですよね。自分と誰かがカメラの前に居て何か行為をする。その中で生まれる二人にしか生み出せないバランス感覚こそがリアルだと思えます。自分が平凡な一個人だとしても、誰かと関わることで生まれる関係は、ふたつとして同じものは無いという考えです。

作品制作でも仕事でも「動き」が面白いと思っています。映像作品を撮るときは映像自体に動きがあって、自分も動いて相手も動いて空気が変わる。あと、映像の動きってカメラの動きじゃなくて、「世界の動き」＝「映像の動き」なんじゃないかなと最近思っていて。自分が面白いなと思ってカメラを動かしながら撮ったとしても、それを「世界の動き」として俯瞰できるような余裕が映像の中にはあるんじゃないでしょうか。「私の世界である」と「私も世界である」という二つの制作態度には大きな違いがあるのではと思います。

藤田：「動き」と言えば、@KCUAの展示でも、「動き」を作ろうという意識はすごく強いです。展示自体は常に動くようなものではないけれど、そこから何か動いているものを想像して欲しい。仲村さんの本もできるだけ止まっていないように作ろうとしていますよね。

仲村：運動体を作り出したいですね。一つは運動体の痕跡としての印刷物を作りたいし、もう一つは本はめくらなければ止まっているものなので、どうやって本に「動き」を出せるのかを意識的に考えます。「REPORT @KCUA」も小さな判型の中で展示の空間性や動きを残せるようなレイアウトを心がけています。

藤田：「動き」というキーワードでつながっているというのを発見できて、なんだか嬉しくなりました。それに、コロナ前には至るところに当たり前のようにあったリアリティが次々に失われてしまった昨今において、「動き」はリアリティを取り戻すためにもより重要なものになっていると言えるかもしれませんね。

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAについて

京都市立芸術大学では、京都市西京区の学内施設として1991年より芸術資料館を開館し、陳列室で所蔵品の展示を行うほか、大小二つの学内ギャラリー、大学会館など展示に使用できるスペースを持ち、また時にアトリエ棟や新研究等なども活用しながら展示活動を継続しています。これらは作品鑑賞の機会を提供し、また学生たちの日頃の活動成果を公開する実験的発表の場としても機能しています。2010年春、京都堀川音楽高等学校の新築移転に伴って、その敷地内南側にギャラリー棟（堀川御池ギャラリー）ができ、そこに京都市立銅駝美術工芸高等学校と共に、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA（アクア）が2010年4月2日からオープンしました。

「@KCUA」は大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所を示す「@」を加えたもので、音読みするとラテン語の「アクア＝水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理想を表現しています。アクア・プロジェクトとは「京都市立芸術大学の三つの機関、美術学部・音楽学部・日本伝統音楽研究センターが連携して、ユニークな芸術研究・教育の一端を地域社会に開いていく試み」として開始されたもので、当ギャラリーにも同様の意図が込められています。@KCUAに期待される役割には、以下の三つがあります。

1　教育・研究成果を広く市民へ公開すること

創立以来140年にわたって本学では、様々な成果を生み蓄積し、大学の内外で公表しています。京都市の中心部に発表の場ができたことによって、より身近な場で市民に公開できる機会が得られることになりました。ここでは在校生、教員および卒業生の研究成果に基づく展覧会、ワークショップ、講演・講座等を市民向けに開催すると共に、京都を中心とする産業界や教育機関、研究機関との連携プロジェクトの成果を発表することが期待されます。

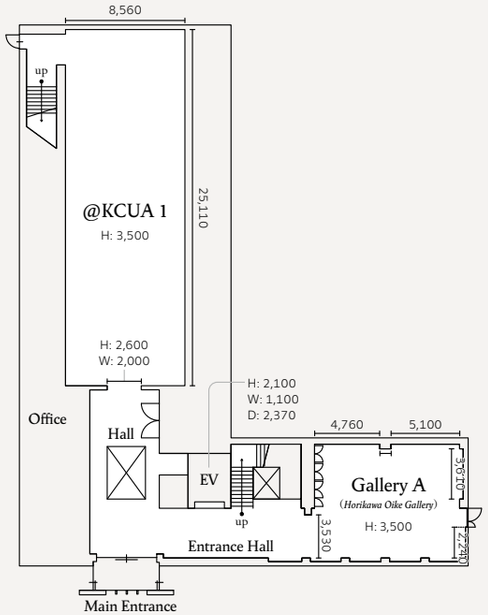
2　芸術文化創出の人材交流の場とすること

ギャラリーにおける展覧会、ワークショップ、講座等の企画に際し、成果の公表そのものを目的とするだけではなく、学内、同窓会、市民、産業界、教育関係諸機関、研究所などとの連携プロジェクトを通じて、広く人々が交流できる場を形成します。

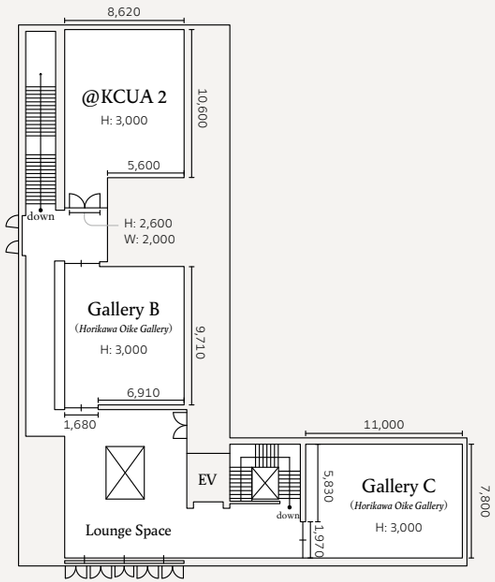
3　芸術資源の連携活用のサテライト機能を果たすこと

本学と市民、京都市、産業界、他の諸機関が連携するにしても、基盤となるのは、情報の収集と交換です。京都が有する芸術資源としての人、物、場所、風景や景観、技術、材料、暮しの知恵に関わる情報を収集し、蓄積し、交流させる機関が必要となります。本ギャラリーは、衛星的な位置を利して、情報の収集、蓄積、交換（発信と受信）の一翼を担います。

1/500
単位｜Scale: mm



1F



2F

2020年度 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA｜運営委員会組織

委員長

鶴田憲次｜@KCUA長／堀川御池ギャラリー館長

委員

石原友明｜@KCUA担当理事
中原浩大｜美術学部長（–2020年9月）
小山田 徹｜美術学部長（2020年10月–）
栗本夏樹｜美術研究科長
礪波恵昭｜芸術資料館長
吉岡俊直｜美術学部広報委員会委員長
中井 悠｜音楽学部教員
奥村美佳｜美術学部教員（副委員長）
森野彰人｜美術学部教員
齋藤 桂｜日本伝統音楽研究センター教員
佐藤知久｜芸術資源研究センター専任研究員
藤田瑞穂｜@KCUAチーフキュレーター／
　プログラムディレクター
岸本光大｜@KCUA学芸員
西尾咲子｜@KCUA学芸員
後藤天平｜事務局長
淵田聡子｜総務広報課長
舟瀬伴子｜連携推進課長
松井菜摘｜附属図書館・芸術資料館学芸員

オブザーバー

天沼 憲｜連携推進アドバイザー

※肩書については2020年度当時のものを記載

2020年
4月22日（水）運営委員会（メール会議）
7月28日（火）運営委員会（メール会議）
10月5日（月）企画・申請展部会
10月7日（水）運営委員会（オンライン）
2021年
3月25日（木）運営委員会（オンライン）

2020年度 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA｜運営体制

@KCUA長
鶴田憲次（堀川御池ギャラリー館長 兼任）

@KCUA担当理事
石原友明（京都市立芸術大学美術学部油画専攻教授）

チーフキュレーター／プログラムディレクター
藤田瑞穂

学芸員
岸本光大、西尾咲子

スタッフ
伊藤学美、清田泰寛

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA
2020年度（令和2年度）年次報告書

発行日：2021年10月31日

編集・発行：京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA
Edited and published by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA
〒604-0052 京都市中京区押油小路町 238-1
238-1 Oshiaburanokoji-cho, Nakagyo-ku, Kyoto 604-0052 JAPAN
PHONE: 075 253 1509
FAX: 075 253 1510
URL: https://gallery.kcua.ac.jp

ブックデザイン | Book design
Studio Kentaro Nakamura

印刷 | Print
株式会社ライブアートブックス
LIVE Art Books Inc.

ISSN 2435-6018
©2021 京都市立芸術大学 Kyoto City University of Arts

https://gallery.kcua.ac.jp

京都芸大美術大学 @KCUA